「ＣＡＴＹ」の名前は,「ＣＡｍｐｕｓ」と「ｃｉＴＹ」からの造語で、地域と大学の相互理解、交流促進を目的として生まれました。
「地域との共生　社会に学ぶ」を合いことばに、高等教育機関としての教育研究の成果を、地域に発信します。また学生が取材活動を通じて、読む・書く・話すといった能力を開発していくことも意図しています。

News CATY
ニュース　キャティ

２０１３年12月　第69号

発行／國學院大學
北海道短期大学部
滝川市文京町３－１－１
TEL0125-23-4111　FAX0125-23-5590
編集事務局長　平野富康

幼稚園で子どもと奮闘

先生の影響力の大きさ実感
小学校との連携が大切
「先生」として意識させること
成長見守る素晴らしさ

私たちは幼稚園教諭二種免許を取得するため、滝川幼稚園で2週間、実習をさせていただきました。滝川幼稚園の子供たちは元気いっぱいで、すぐに打ち解けることができました。

最初の1週間は様々なクラスを見学させていただき、その年齢に応じた接し方や指導の仕方の違いを学ばせていただきました。また、先生方のカラーがそれぞれあり、どのクラスも違う良さや特徴があることにも気づき、先生の影響力の大きさを改めて感じました。

残りの1週間は2人とも、5歳児のクラスに入らせていただきました。小学生に一番近い年齢ということもあり、自我が芽生えているため個々を一つにまとめることが大変で、叱り方や喧嘩の仲裁など本当に苦労しました。

しかし、日毎に子供たち一人ひとりのことを知っていくうちに、心が通じるようになり毎日が楽しくなりました。この2週間を通して幼稚園児の学習面や生活面を知り、小学校と幼稚園児の連携がどれだけ大切なのかということが分かりました。

今回の実習を生かし、子供の成長をワンステップずつ知る努力をすると共に、この貴重な経験を基に教育を行えるような教師を目指そうと思いました。（幼児・児童教育学科　児童教育コース2年／藤田渓斗・山本奈菜）

幼稚園実習での3週間を終えて、最初の感想は「頑張った、やりきった」という気持ちでした。この達成感を得られたのも、3週間の実習の間、辛いことも乗り越え、自分の出せる力を精一杯出せた結果だと思います。

幼稚園実習では、実際の現場においての「保育所との違いを学ぶ」という事を主な課題として取り組んでいました。私が実習中に苦労した点の一つが、「子どもを注意する際の態度を厳しくする」ことでした。保育者は、子どもたちにとってただの「遊んでくれるお姉さん・お兄さん」ではなく、「先生」として時には厳しい態度を示していく必要があると思いました。悪いことをした時に、優しく、笑顔で言い聞かせても、子どもたちはその場しのぎで反省するフリをするだけで何も効果はないことが分かりました。

設定保育・完全保育に関しては、完璧ではなかったけれど、自分の良いところ、悪いところを把握し、回数を重ねることに改善していくことができたのでとてもいい経験になりました。なによりも、子どもたちがすごく楽しそうにしていて、喜んでくれたのでそれだけでも実習した甲斐がありました。

実習中は大変なこともありましたが、子どもたちと毎日楽しく一緒に遊び、笑い、ご飯を食べたり、お手紙を書いてきてくれたり、最後の日には泣いてくれる子もいて、成長を見守るという仕事の素晴らしさを改めて実感しました。今まではどういった先生になりたいかはっきりとした目標はありませんでしたが、今回の実習でこういう先生になりたい、と理想像を明確にすることができたので、長いようで短い三週間はとても意味のあるものとなりました。（幼児・児童教育学科　幼児保育コース2年／肥後谷歩美）

介護実習Ⅱで学んだこと
根拠持った支援大事

私は、今回介護老人保健施設で実習をさせていただきました。その中で、特に試行錯誤して取り組んだ「移乗介助」と、受け持たせていただいた個別担当利用者さんについて報告させていただきます。

人が立ち上がる時には、前傾姿勢になることで臀部を浮かせて頭を上げるという自然な動きがありますが、これは移乗介助を行う際にも重要になるため、頭で理解するだけではなく自分の体で覚えられるよう意識しながら実践させていただきました。また、介助を行う際に一つひとつの動作を伝えていくことで利用者さんの心身の負担を軽減できることなどを実践の場で体験的に学ぶことができました。

個別担当者さんについては、「レクリエーション（活動）にお誘いし、そこで他の利用者さんとの会話の支援を行う」といった内容の介護計画を立案させていただきましたが、お誘いするという時点で上手くいかなかったり、会話の支援が行えなかったり、自分の思っていたように進むことがほとんどありませんでした。

しかし、自分の声掛けや利用者さんの心身の状態などを振り返り、上手くいかなかった原因を追究することで次の実施に活かすことができたのではないかと思います。

この実習を通して、「根拠をもってかかわることが大切である」ということを強く感じました。学校で学んだことをもとに現場で実践し、専門職として根拠を持った支援が行えるようこれからも学んでいきたいと思います。（専攻科福祉専攻／澤田さくら）

優勝は大竹さん 今西さんペア！
第1回百人一首大会

上の句を覚えて、下の句の札をとる。上下の句を繋げて一生懸命覚えたはずなのに、目の前の平仮名ばかりの札には意外に手が出せない。初めての百人一首体験には、こんな感想もあるのではないだろうか。

競技方法は、10月末に学生同士が実現に向けて話し合い、なるべく一度に多くの学生が参加できる方策を考えた。結果、二人一組のチームを組んで、50枚の読み札に対して35枚を取りあう「ちらし取り」を行うトーナメント戦になった。

「第1回百人一首大会」は、大雪の12月14日。図書館2階の会場には14人の学生が集まった。寺岡真知子図書・紀要委員長が開会の辞を述べ、学生たちにエールを送った。いよいよ続いて、歌人でもある国文学科の月岡准教授のきりとした第一声で、わくわくどきどきの百人一首大会が始まった。

真剣勝負の勝ち抜き戦を制した優勝ペアは、国文学科1年大竹未紗さん、今西響子さん。賞品として図書カードが寺岡委員長より手渡された。準優勝の鈴木・野中組共に国文1年）には、滝川産の米、ふっくりんこ5キロが贈呈された。

大会では学科を問わず応募を募ったが、今年の参加は日頃百人一首に親しむ（苦しむ？）機会の多い国文学科の学生が主となった。来年以降は、道内の児童館などでも行われている板製の下の句かるたも、工夫次第で取り入れることができるだろう。7年後のオリンピックもあり、日本人のアイデンティティが問われる。日本の伝統文化の何か一つでも、多くの学生に親しんでもらいたいと思っている。

食物への愛情など実感
餅つきを体験して　農家の皆さんと交流

児童教育コースは12月3日に稲作体験の集大成である「餅つき」を行いました。

前日にもち米を研ぎ浸しておく準備をし、当日、稲作体験企画班が学校につくと、伊藤さんを筆頭に15人程の農家の皆さんが準備を始めてくださっていました。遅れをとってはいけないとお餅をつく班、お餅を丸める班、お雑煮を作る班と大まかに分かれて作業を始めました。お餅つきは、お餅のタネは弾力があり、また杵がなかなか重く10回位つくと腰が痛くなりました。お餅を丸める作業は、手のひらに収まるくらいのお餅を手にとり丸くします。簡単そうに見えてこれが難しかったです。コツを教えて頂きましたが習得できませんでした。中にはすぐに習得し、新たな才能を開花している人もいました。それらの作業と同時進行で出来たてのお餅を食べました。出来たてのお餅はフワフワでモチモチでとても美味しかったです。ふつうの白いお餅に加え黒豆入りのお餅、かぼちゃ入りのお餅、また新米でおにぎりも作りました。

詩を書くことは言葉と一体となる時間
「広がり」に創作意欲

言葉と一体になる時間。詩を書く時間はまさにそうだと思う。小説は自分自身と対話をしながら書いていくので客観性が必要だ。でも詩は〝ことば〟そのものと紙の上で交わる感覚がある。創作Aの授業で橋本先生に詩の指導をうけて、そう強く感じた。

授業は学生同士の合評で進む。國學院大學短大部に入るまで私の周りには小説や詩を書く人がいなかったので、同年代の学生の批評はとても刺激になった。作品の中のひとつの表現をこう捉えるのか、という新鮮さが誰の作品の合評のときにもあったからだ。

その中で書いた詩が今年の「北海道詩集」に掲載された。自分の作品が活字になって詩集に載ることももちろん嬉しかったけれど、11月の合評会も大きな経験になった。こちらではうんと年上の方々からの批評を聞くこともできた。何年も詩を書き続けている方々が、私の拙い詩を読みこんで真剣にエールを送ってくださった。

詩は誰かが読むたびに何度でも生まれ変わる。そしてそれを通して、気づかないうちにその誰かとつながっているのだと思う。書くことは一人の作業だが、その広がりを感じるたびに、私はまた書きたくなる。（国文学科1年／佐藤香奈恵）

伝統の獅子舞
長野県佐久市の正月

私の地元、長野県佐久市八幡上町地区の獅子舞の様子をご紹介します。

私は獅子保存会のメンバーとして活動しています。八幡地区の獅子舞は牝の獅子とされ、悪魔祓いや獅子舞を行った家の繁盛を祈ったもので、この獅子に噛まれた人はその年病気をしないとされます。二百年以上前から続けられており、遠く名古屋の方からうたわったものだと言われています。

印象的なのは「デク」という人物と獅子の掛け合いです。この「デク」とは、木偶の坊などのデクからきていて、獅子舞において司会や見物人、獅子の後ろ足などの役割を持っています。掛け合いでは「デク」が獅子にジョークやその時の時世に合ったことを言うなどして、その場を盛り上げます。

八幡地区の獅子舞は、正月元日の公民館での新年会や、地区の八幡神社（『吾妻鏡』にも記述があるとされる古い神社）の拝殿や境内、地区の家々などで舞われます。昔は地区のすべての家々で獅子舞をしましたが、獅子舞をする獅子保存会の高齢化と戸数の増加により、現在では新築の家、獅子保存会に寄付をした人の家などに限定され、減少傾向にあります。

ですが、獅子舞は正月の伝統行事であり、獅子が人の頭を噛むのは風物詩です。私は獅子保存会のメンバーとして将来、この伝統が絶えないように取り組み続けていきます。（国文学科1年／岩下忠輝）

授業の進め方などを学ぶ
公開研究会に参加して

私たち児童教育コースは、滝川第二小学校で滝川市教育振興会主催の公開研究会に参加させていただきました。模擬授業で一人ひとりがどのような授業をしていくか模索している中で、このような場に参加させていただくことができたことは、貴重な機会でした。

私は、特別支援学級の授業に参加させていただきました。大学の講義の中で、特別支援学級について学ぶ機会が少なかったので、実際に見ることができて、授業の中での工夫や教材教具に対しての工夫、講義ではなかなか学ぶことのできない細かいところまで見ることができ、多くのことを学ぶことができました。

また2年生の授業にも参加させていただき、教師が児童に対して今日学習する内容を、どのように興味を持たせ、意欲を湧きたてるか、児童全員が理解できる工夫について学びました。そして、発問の仕方についても、児童が考えやすい発問と感じました。模擬授業を行っていく中で、言葉をわかりやすく伝えることが自分の中で、一番苦手なことだと感じています。それをプロの教師が授業する姿を見て、そこに多くのヒントを感じることができました。

来年には教育実習があります。そこまでに研究会で吸収したことを、自分のものにできるように日々の努力を大事にして、もう一度、一人ひとりが今の自分の取り組み方について考えていく必要があると感じました。

このような貴重な場を提供してくださったことに感謝し、また恩返しできるように、一人ひとりが少しでも教師のスキルを上げて、成長していくべきだと思いました。（幼児・児童教育学科　児童教育コース1年／兼近賢一）

新しい詩に期待
『北海道詩集』に2作品

文芸創作で詩と小説を担当している。「教えている」とは言いたくない。文学は教えることはできない魔性を秘めているからだ。

私にできることは、ムキになって学生と向き合い、私なりの文学観をぶつけてゆくことだ。

とにかく「書く」「読む」ことを重要視して、学生のなかに秘められたピカッと光る感覚を掘り起こしてゆくことが楽しみである。

若いパワーは恐ろしいもので、自分が傾倒できる作品に出合うと作品の質がぐんと伸びてくる。詩の場合　イメージのふくらみ、瞬発力の強さ、そして収斂と形ができあがってくる。小説の場合は、「起」「承」「転」「結」の流れがところどころの伏線も含めて読み手に伝わってくる。

この度、創作Aで詩を書いていた正道奈々未さんの作品『骨片』と佐藤香奈恵さんの『水脈のリズム』が北海道詩人協会発行のアンソロジー『北海道詩集』に掲載された。この協会はそれぞれの同人に属している全道の詩人たちから成り立っており、二人の作品は「新しい詩の書き手」として認められたことを意味する。11月9日の「北の詩祭」では多くの詩人たちからその才能を称賛された。

今後の二人の作品の行く手を見守ってゆきたい。（国文学科教授／橋本征子）

子育てサロン「ありす」

子育て中のお父さん、お母さん、お子さんのための広場です。お子さんを連れて、気軽に遊びに来て下さい。

対象者　おおむね０～４歳未満の子どもとその家族
参加料　１家庭あたり100円（保険料を含む）
申し込み　開催日の前日15:00まで（先着30人）

開催日：1月17日(金)
テーマ：スタンプラリー

☆入試情報☆

○自己推薦入試　第Ⅲ期
○日本語に関する基礎知識を問う入試　第Ⅰ期
○社会人・帰国子女特別入試　第Ⅱ期
○専攻科福祉専攻　第Ⅱ期
○出願期間：H26.1.16(木)～1.28(火)
　選考日：H26.2.1(土)
　合格発表：H26,2.8(土)
□平成26年度入試より、センター入試導入
　実施日：H26.1.18(土)・19(日)
□社会人対象進学相談会
　日　　時：H26.1.15(水)　18：00～
　会　　場：本学
　詳細・お問合せ、資料請求は入学係まで（TEL0125-23-4111）
進学相談・校舎案内は随時受付